

「おねがいしますう！ このままだと原稿落としちゃうんですよお！ 可愛い後輩の承認欲求のために、文字通り一肌脱いでくださいっ！」

「しつこいなあ。なんだよ、承認欲求って」

「SNSに『ちんぽの描き方が非モテまるだし笑』とか『処女捨てたらリアリティのあるちんぽが描けますよ笑』とかクソムカつくコメントも来るんですっ！ もう悔しくって悔しくって！ 最高の新刊で見返したいんです！」

「非モテも処女も事実だろ」

「事実ですけどっ！ 悔しいっ！ ちんぽ上手く描けるようになりたいっ！」

私は、広瀬先輩の激エロヤリチン実体験を元に乙女向けのエロ漫画を描いている。

「過去の年間最高人数？ あー……大学三年の時かなあ……年二百人くらい？」

「セックスはもちろん大好きなんだけど、それよりも女の子が好きなんだよね。女の

子が気持ちよくなってくれるの、すげー嬉しい」

「無理矢理やったことはないよ？ 『来る者拒まず、去る者追わず、嫌がっている子には手を出さない』が、ポリシーなんで」

「俺、身体デカイから威圧感あるじゃん？ 自分から行ったら怖くて断れない子もいると思うんだよ。だから向こうから来て欲しくて、勉強も運動も超頑張った。で、超モテてる」

最高だ。こんなリアルなセックスエピソードを持つ人間が身近にいるんだ、参考にしないのは勿体なさすぎる。私は、ランチや夕食を奢ることで日々取材に励んでいた。広瀬先輩は話がうまく、自分の体験談を臨場感たっぷり話してくれる。聞いていて、ちよつと足の間がむずむずしてしまうくらい。

手を握られて、手マンの実演をされた時は本当にヤバかった。

「手、貸してみろ——ちょっと触るね。こうやって指を揃えて上の天井を優しく撫でるんだよ」

「お、おお……」

「たまに、優しく押したり、ブルブル震わせたり……これやると、潮吹く子多い。どう？ 参考なった？」

「な、なりました！ ありがとうございます！」

帰って速攻で思い出しオナニーをしてしまったことは言うまでもない。

あくまで手マン（の真似事）がよかったのであって、先輩で抜いたわけではない。

そして、先輩の話を元に推しのえっちな漫画を仕上げた。最推しのキャラクターと、名前と顔の無いヒロインがセックスをする夢小説の漫画版だ。

ゆるくて可愛いほんわかイラストで、ヤリチンばりのエグいセックスを描いている物珍しさもあってか、作品は立て続けに万バズ。フォロワーは一人目目前。同人誌も完売した。

ところが、注目が集まればアンチが湧くのも世の常。「これはちよつとちくちく言葉じゃないですかねえ」という匿名のメッセージが、ちよくちよく届くようになった。

「処女すぎる」

「彼氏イコール年齢とかじゃないですよね」

「女性用風俗とか一回行ってみた方がいいですよ」

確かに、私の作品には三次元の生々しさが圧倒的に欠けている。足りないのは生の体験だ。本物のちんぽを見たという経験が、間違いなく私を成長させてくれる。

そしてフォロワーは一人を突破。漫画は数万いいねの大バズり。同人誌もバカ売れ。アンチは悔しがって爆発しました。ああ、なんという完璧な計画！

「深沢ちゃんさあ」

私の輝かしい未来予想図を聞いていた広瀬先輩は、けだるそうにこちらへ視線を寄越した。

鋭い吊り目は、どこか意地悪そうな光を宿している。薄い唇には、満面の笑顔や優しい微笑みよりも、人を食ったような不敵なにやけ面が似合う。

背はすらりと高くて、筋肉もしっかりあるけれど、顔立ち自体は誰が見ても文句なしの正統派イケメンではない。だからこそ、美の基準から少しずれているがゆえの抗いがたい色気を感じる。

「俺はもうすぐ経験人数が千人いくんだけど」

「私のフォロワー数の十分の一ですね」

「うっせ。全然分野が違うだろ」

先輩は椅子を回転させ、正面から私を射抜くような視線を向けた。

「俺はセックスがめっちゃ好きで、真剣にやりまくってきた結果、どんどん数が増えたんだよ。数を稼ぐために女の子を抱いたことは一度もない」

「えっ！　ないんですか？　九百九十八人も抱いって!？」

「ない。俺は、セックスに対する高いモチベーションだけでここまで来た。深沢ちゃんなんのためにエロい絵を描いてるの？　絵を描くのが好きだから？　フォロワー数を増やしたいから？　人から評価されたいから？」

先輩の鋭い問いに、私はぐうと呻くことしかできなかった。

絵を描くことは好きだ。子どもの頃からずっと好き。

でも、描いた絵を褒められるのも好き。誰かのために描いて、それを喜んでもらえるのも嬉しい。たくさんの人から評価されるのはたまらない喜び。

私は先輩の整った顔を睨むように見据え、魂からの本音をシャウトした。

「全部ですっ！ 絵を描くのも褒められるのも数字が伸びるのも、全部好きいっ！だから、先輩のちんぽ見せてくださあいつ！」

「……っ、はは！ 正直だなあ、お前！」

先輩は一瞬面食らったように目を見開き、次の瞬間、こらえきれないといった様子で吹き出した。お腹を抱えて大笑いするその姿は、いつもより幼く見える。

明るめのブラウンヘアや艶のある肌も相まって、私より二歳年上の二十七歳には見えない。そして、散々笑い転げてから、先輩は顔を上げた。

「その正直に免じて、見せてやらんこともない」

「え、本当ですか!? 男に二言はありませんよ!」

「おー、ただし条件がある」

先輩はぴっと人差し指を立てた。イケメンは二次元的リアクションも様になる。

「何ですか? 何でもしますよ!」

「そうだなあ——むちゃくちゃ可愛い顔で『広瀬先輩のちんぽ見たあゝい♡』っておねだりできたら、見せてやるよ」

「えっ!？」



正気か？ 一般成人女性オタク女のぶりっこなんて、誰が得するの？

「なんでそんなことしなきゃいけないんですか!？」

「はあ？ 俺だって恥ずかしいところ凝視されるんだから、お前もちよつとくらい体張れつて。てかそれ言うのと、なんで俺がちんぽ見せなきゃなんねえんだってなるだろ」

「それもそうですけどお……可愛いなんて無理ですよお……」

「へーきへーき、女の子はみんな可愛いんだから」

プレイボーイ的な発言をしながら立ち上がった先輩は、私のデスクに手を突き、逃げ場を奪うように身を乗り出してきた。

「いや、近い近い！ こんな先輩後輩の距離じゃありません！」

「そう？ これくらい、挨拶みたいなもんだろ？」

視界のすべてが、端正な顔面で埋め尽くされる。

こんな至近距離で先輩と——いや父親以外の男性と——対峙するのは、これが初めてだ。

鼻先をかすめたのは、ふんわりと甘い香り。柔軟剤だろうか。それとも、香水のラストノート？ 人を食ったような顔面から、こんなにも優しい香りがするなんて。

（ちよつと、メロがすぎませんか……!?）

脳の処理が追いつかない。その逞しい腕に強引に引き寄せられ、ぎゅつと抱きしめられたい、なんて頭が勝手に考えてしまう。

ダメ。ダメだ。この人はとんでもないヤリチン。私がしつかりしていなければ、一瞬で経験人数の九百九十九人目になることだけは間違いない。

そうになったら最後、これまで築き上げてきた「なんでも話せる先輩後輩」という関

係性は崩壊してしまう。先輩のエロい体験談をヒアリングできなくなる。

「ほら、上目遣いでえ、顎に手置いてえ——あ、前髪も直そうな」

長い指先が、私の前髪をさらりとすくい上げる。一瞬触れられた額がぶわつと熱を持った。

いつも通りのちよつと意地悪そうな声。それなのに、いつもよりも近い距離で囁かれているせいで、なんだか甘ったるく聞こえてしまう。

「これで準備完了。さ、いつでもどーぞ？」

先輩は自分のデスクに戻って、長い脚を組んで座り直した。「いつでも」と言われても、緊張して声が出ない。可愛い顔なんてどうやって作ればいいんだ。深夜アニメの

美少女キャラクターを真似すればいいのかもしれない。目の中に光を集めて、頬をピンク色に染めて、萌え萌えのアニメ声を出せってことか。

（ムリムリムリ！　そういう媚び方、したことないし！）

「せ、」

「んー？」

「せ、せ……」

喉がからからに渴いている。無理だ。私は三次元に住む二十五歳女性。しかもオタク。きゆるきゆるの二次元美少女にはなれっこない。

それでも、絶対に本物のちんぽを見たい。本物のちんぽを観察し、写生し、神絵師になりたい。

二次元美少女の顔面にはなれなくても、萌え声は出せなくても。気合と覚悟さえあれば語尾にハートマークを付けることくらいは。私にだって……きっとできる！

「先輩のおちんぽ、写生させてくださいい……♡ おねがいしますう……♡」

耳を熱くしながら、私はこれまでの人生で一度も出したことのないような甘ったるい声を絞り出した。さあ、どうだ。笑いたければ笑うといい。

ところが、先輩は一瞬目を見開くと、ふっと優しく表情を緩めた。

「おお……今の、ちよつとグツときたかも」

「なっ!? えっ、こんなんでいいんですか!？」

「『こんにちは』もいいんだよ。写生と射精をかけたのか。さすがオタクちゃん、アレン

ジが効いてるじゃーん」

「いや、そうじゃないんですけど！　今のは言葉の綾っていうか！　いちいち分析しないでくださいよ！」

必死すぎて無意識だったが、どうやら私は最悪のダブルミーニングをぶちかましてしまったらしい。

顔に一気に熱が集まる。自然に早口になって弁解しようとする私の様子を見ながら、先輩は笑った。

「いーよ、深沢ちゃんの可愛い顔とユーモアに免じて見せてやっかあ」

「本当ですか!？」

「おう。男に二言はないからな」

やった！ 心の中でガッツポーズを作る。

これで私も神絵師の仲間入りだ。最高のちんぽを描き、一万人(※予定)のフォロワーを喜ばせよう。

アンチだって、きっとファンに変えてみせる。だって、九百九十八人と交戦し、数々の激エロ武勇伝を作ってきた歴戦の肉棒は、さぞや素晴らしい形をしていることだろう。それを漫画に反映させたら？ 全人類メス堕ち確定の神漫画間違いなしだ。

「じゃ、とっとと仕事片付けてラブホ行くぞー」

「はい！」

「ふ、いい返事」

先輩は満足げに目を細めると、腕を伸ばして私の頭を乱暴に撫でた。髪がくしゃくしゃになっちゃいます、なんて文句は言っていられない。一秒でも早く残業を片付けなければ。私はパソコンに向き直って、猛烈な勢いでキーボードを叩き始めた。

「おい、普段からその勢いで働けよ」

横から先輩の呆れた声がしたけど、無視。オタクとはそういう生き物なのだ。これも、「主語が大きい！」と言われてしまいそうだけど。





「——それでは、よろしく願います」

ベッドの上に正座し、同じくベッドの端に腰かけている先輩に向かって深々と頭を下げる。入室してから三分以内。リアルタイムアタック並の展開に、先輩は少し引き気味に苦笑した。

「なあ、本当に風呂入らなくていいの？」

「はい、私が見たいのはリアルなちんぽなんです。『むっわああ……♡』みたいな効果音がするような、そういう生々しいちんぽを写生したいんですよ」

「深沢ちゃんがそれでいいなら、俺はいいけどさあ……」

観念したように先輩がベルトを解く。衣擦れの音がやけに大きく聞こえ、私は反射的にぐくんと生唾を飲み込んだ。

そして、九百九十八人の女性を翻弄してきたそれが、ついに私の目の前に登場した。

「おお……こういう形なんだ……」

私はクロッキー帳を抱えたまま、吸い寄せられるように顔を近づけた。

大きい、のかもしれない。太くて長い、のかもしれない。比較対象がないから分からない。

でも。なんか。なんだか。想像していたよりも、ずっと――

「……普通、なんですね。いてっ」

「おい、さすがにそれは俺に失礼すぎるぞ」

「叩くことないじゃないですかぁ！　なんでヤリチンのちんぽなのに、黒光りしてないんですか？　もっと凶器みたいなやつが『ぼろん♡』とご登場なさると思ってたんですけどぉ……」

「エロ漫画の読みすぎだろ。どうなってるんだ、お前の脳内！」

先輩はぷりぷり怒っているけど、仕方ないじゃないか。オタクは、大根くらいの大さの巨根を持つ二次元男性を見慣れているんだから。

漫画的な禍々しさは欠片もない。色は赤に近いピンク色で、膝の上で丸くなって眠る仔猫のようにふにゃんと足の間に収まっている。

肉棒、肉塊、ビッグマグナム。どれもそれを形容する言葉としてふさわしくない。（どちらかと言うと——可愛いとか、そういうマスコットキャラクターみたいとか、そういう感じだよね……）

でも、それを伝えたら再び小突かれてしまいそうだ。

「あの、三次元の男の人のおちんちんって勃起してもこんな感じなんですか？」

「んな訳ないだろ。勃ったらもつとでけえわ。てか何で呼び方変わってるんだよ」

「ちんぽって言うよりおちんちんって感じだなあって……いだだだだ」

「それ以上言ったらマジで怒るからな」

「なら、勃起したところを見せてくださいよお！」

「お前なあ……」

可愛い後輩の額を人差し指でぐりぐり押ししていた先輩は、呆れたようにため息をついて、パチンとデコピンを食らわしてきた。普通に痛い。

「簡単に言うけど、この状況で勃つわけねーだろ、バカ」

「そんなあ！ 困ります！ 私が見たいのは『ぼろん♡ ぶるん♡ むわあゝ♡ バキバキビビキィッ！』なんです！ お願いしますよ！」

私が頼み込むと先輩は目を閉じてしばらく考えたあと、「それならさあ」と口を開いた。

「深沢ちゃんがオカズになつてよ」

「えっ!？」

「『えっ!？』ってなんだよ。お前に勃起見せるためにオナニーしてやるからさ、そのためのオカズを提供しろって話」

オカズ。からあげとか生姜焼きという意味ではない。先輩の性的興奮を煽るオナ

ペットになれということだ。——無理じゃない？

私たちはいつも仲良しの先輩後輩で。あちらは百戦錬磨のヤリチン、こちらは冴えない処女オタク。——詰んでない？

「せ、先輩って、私なんかでシコれるんですかあ……？」

「やったことないけど、できると思うよ。お前、可愛いし」

「か、可愛くないですってえ……」

「可愛い可愛い。すぐに真っ赤になっちゃうところも、スケベなところも、今足もじもじさせてムラついてるの誤魔化そうとしてるところも。すっげえ可愛い」

指摘されてハツとする。

私の左右の膝は、無意識のうちにぴたりとくっついて、すりすりと擦り合わされていた。太ももの震えを隠すように、あるいはその内側の熱を鎮めるように。

先輩はそれを見逃さず、意地悪な笑みを深めると、私の胸元に指を伸ばした。

「ここ、見せてよ」

とん、と人差し指で胸の中心を軽く突かれる。それがスイッチだった。

「ほ、本当に、勃たせてくれるんですよ……!?」

「勃たせる勃たせる」

「約束ですからね……!」

私は、震える手でブラウスのボタンに手をかけた。ぱさりと下に落とし、腕を後ろに回してブラジャーのホックを外す。きつい締め付けからの解放感。

（これは資料のため、これは資料のため……）

自分に言い聞かせるようにしながら、先輩に向き直った。手はどこに置けばいいか迷って、鳩尾に置く。

上半身に何もまともっていない状態になった私をまじまじと見つめて、先輩はごくりと息を呑んだ。

「……へえ、結構デカいじゃん」

切れ長の瞳が私の胸の質量に釘付けになっている。

（恥ずかしい……♡ おっぱい、ずっと先輩に見られてるう……♡ 乳首、どんどん大きくなってるの、絶対バレてるう……♡）

熱を帯びた視線に耐えきれず、私は反射的に両腕を交差させて胸を隠そうとした。



「何で隠すの？ いいおっぱいなのに」

「恥ずかしいからあ……あんまジロジロ見ないでくださいよ……」

「見なきゃシコれないだろ？ いいから腕どかせって」

「あっ……♡ やあ……♡♡」

手首を強く掴まれる。そのまま腕を開かされるとぷるんと胸が揺れて、先輩の喉仏が欲情を飲み込むように大きく上下した。

さっきまでふんにやりとっていた場所が、むくむくと起き上がり始めている。

（全然形が違う。これだけの刺激で、あんなに変わっちゃうんだ。私の胸を見ただけなのに……♡）

「すごい……」

「やっと分かった？　まだまだ、こんなもんじゃないから」

「えっ、まだ大きくなるんですか!？」

「なるなる。まあ見てろって」

先輩はそう言うのと、片手で自身を握り、ゆるゆるとしごき始めた。慌ててクロッキ―帳を手を取った私は、夢中で鉛筆を走らせていく。

「おお……っ」

「反応処女すぎ」

思わず感嘆の声を上げると、先輩はくつくつと笑った。

（すごい。本当に血管が浮き出てくるんだ。亀頭の下段差も、こんなにはっきりと強調されるんだあ……♡）

先輩が押し殺したような低い喘ぎを漏らすたびに、先端から透明な我慢汁がじわじわ滲んでくる。

鉛筆が止まらない。全部、全部、描き写したい……♡

「どう？　なかなかだろ」

「そうですね……私が知ってるちんぽの形になってきました……」

「ふふ、処女のくせによく言うわ」

先輩は可笑しそうに鼻で笑いながら、さらに速度を上げて自身を扱き上げる。私は、その猛々しい変貌を一片たりとも逃すまいと食い入るように見つめていた。

（ヤバイ……本物のちんぽ、かつこいい……♡♡）

生物としての迫力がある。比較対象がいなくても分かる。先輩のちんぽは、大きくて長くて太い。

触ったらどういう質感なんだろう。金属みたいに硬いんだろうか。それとも、人肌の温かさを感じられるんだろうか。

それから、もしも、これはあくまで仮定の話だけど。

（おまんこに挿ったら、ものすごく気持ちいいんじゃない……？）

卑猥な妄想が止まらない。下腹部がじわじわ熱くなる。先輩はモジモジする私を見ながら、ニヤリと口角を持ち上げた。

「なあ……観察に夢中なのはいいけどさあ……乳首くりくりゆくりゆしてるせいで、写生できてないぞー？」

「ひゃっ♡ あ、っ、これはあっ……♡」

いつの間にかクロッキー帳と鉛筆はベッドの上にあった。私の指先は、自分の胸の

先端を摘まんでいた。ピンと摘まみ、コリコリと執拗に弄り倒していたのだ。無意識下の行動だった。

やめなきゃいけないのに、指が離れない。先輩に見られているという興奮で、指先の動きはより卑猥に加速する。不自然なほど硬く尖りきった私の乳首も。だらしなく緩んだ顔も。全部見られちゃってる……♡

「深沢ちゃんはチクオナするタイプかぁ♡ さすがスケベオタク♡」

「ち、ちが……っ、これは、あのっ、先輩に、もっと、勃起してほしくてえ……♡」

「へえ……？ 俺のため？」

「そ、そうです……っ！ 資料のために、頑張ってる……っ」

「資料のためならチクオナするとか、スケベすぎだろ♡ スケベ♡ スケベオタク♡」

とろけるような低音ボイスで「スケベオタク」と囁かれ、脳に痺れるような衝撃が走る。全身がビクンと跳ねたことについて何かを指摘される前に、私は慌てて先輩の股間を指差した。

「そろそろ完璧に、勃ちましたよねっ!？」

視線の先にあるそれは、怒張した血管を浮き上がらせて猛々しく反り繰り返っている。もはや「可愛い」なんて呼べる代物ではなかった。ふにゃんとしていた面影はどこにも見当たらない。効果音を入れるなら「ずるんっ♡」とか「ビキビキィッ♡」みたいな迫力がある。

（さすがにこれ以上はないはず……今度こそちゃんと写生しなきゃ！）  
ところが先輩は、ニヤニヤしながら首を横に振った。

「これならまだ——七割くらいかな」

「——へ？ 七、割……っ？」

「言っただろ。勃ったらすげえて」

嘘でしょ!? 頭が真っ白になる。こんなにパンパンに膨らんで、触らなくても分かるくらい硬そうなのに、まだ未完成だというのはか。

「う、嘘……っ、これ以上大きくなったら、それこそ二次元のちんぽじゃないですか……っ！」

「おい、漫画と現実を一緒にするなよ」

「すごい……まだ大きくなるんだあ……」

「全然聞いてねえな——なあ、もっとすごい……見たい？」

「……っ！」

見たい。見たすぎる。本音を言うところちょっと怖いけど、好奇心には抗えない。

（これは資料。これは資料。最高の絵を描くための、資料だから……!）

こくんと頷いた私を、先輩は「スケベ」と意地悪そうな笑顔でからかってきた。

「ち、違います！ いや、スケベなのは間違いないけど！ 資料のためだから！」

「資料ねえ……」

「そう、しりょっ……うわああっ」

不意に肩を掴まれたかと思うと、世界がぐるりと反転する。悲鳴を上げる間もなく、ベッドに押し倒された。覆い被さってきた先輩の重みに息が止まる。すらりと細身だと思っていた身体は、腕で押してもびくともしないくらい逞しい。



逃げようとしても、両脇に突かれた先輩の腕が檻のように私を閉じ込め、ただその熱い呼気を顔に浴びるしかなかった。

(あっ……♡　なんか、すごくいい匂いする……っ♡♡)

ほんのりと甘い匂いが鼻腔について、私の思考を麻痺させていく。オフィスで接近した時と同じ。でも、違う匂いも混じっている。男性の、先輩自身の、肌と吐息の匂いだ……♡

「ちょっ……！　何、するんですかあ……っ！」

「んー？　勉強熱心な後輩のために、資料を増やしてあげようかなあと思って。やさしー先輩だろ」

「けけけ結構です！」

「『生の体験が欲しい』って言い出したのは、深沢ちゃんだろー？」

先輩の手が捲れ上がったスカートの中にすると忍び込み、太ももを撫でる。色気のない悲鳴を上げた私の耳元で、先輩は低く囁いた。

「本当の手マン、体験してみたくない？」

「あっ……♡ まにあってまっ……♡ ひゃああっ♡♡♡」

「こーんなに、びっしょびっしょなのに？ 触って欲しくてずうっとおまんこイライラしてたんだろー？ ごめんねー、気づくの遅れちゃって」

すりっ♡ すりっ♡ くちゅくちゅ♡ くちゅくちゅくちゅっ♡

先輩の指が、下着越しに捉えたクリトリスを優しく撫でさする。

「んああっ♡ ら、だめ、そこ……っ！ あ、ああっ♡♡♡」

「処女のくせに、クリめっちゃデカいじゃん？ お前、家でオナニーしまくってるだろ？」

「ひゃああっ♡ あっ♡ あっ♡♡ してないっ♡ オナニーしないっ♡♡ やああっ♡♡♡ だめっ♡♡♡ だめ、そんな、さわらないでえええっ♡」

「う・そ・つ・け♡ 一人でシコりまくってるからこんなに敏感デカクリなんだろうちよつと触っただけなのにばんばんに勃起しちゃって……♡ 下着の上からでもまんまるなの分かるんだけど♡」

まるで、私の身体の構造を全部知っているみたいなの、正確な愛撫だった。愛液でぐっしりと濡らした下着がクリトリスにぴったり貼り付き、指の動きに合わせてくちゅくちゅと卑猥な音を立てる。

（バレてる♡♡♡ 毎日真っ赤になるまでクリ弄り倒すオナニー狂いなこと、先輩に

見抜かれちゃってる♡♡♡)

くりゅっ♡　くりゅっ♡　くりゅっ♡　くりゅっ♡

シコシコシコシコ♡　ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡　シコシコシコシコ♡

オナニーとは全然違う。男の人の硬くて長い指に、パンパンに腫れ上がったクリトリスをこねくり回される。私のおまんこは正直すぎるくらいに反応していた。

「体、ずーっとビクビク跳ねてる。そんなに気持ちいいのかよ、このスケベオタク♡」

「ん、あ、ああああああっ♡　お、おっ♡♡　ほえ、っ♡♡♡　だめ♡♡　あああんっ♡」

「あは♡　声もデカすぎ♡　いつもそんな声でシコってたら、お前のオナ声、隣の家まで聞こえてるってー♡　あー、かわいいそ♡　隣の人、お前のせいで絶対寝不足だよ♡」

頭が真っ白になって、手足がガクガクと震えだす。

下着を脱がされ、敏感な突起を直接ピンピン♡と弾かれると、目を逸らしたくなるほどの愛液が奥から溢れてくる。先輩の指をびっしりと濡らしていく。

見たくない。なのに、見てしまう。だって、こんなの、えっちすぎる……♡

クリ皮を剥かれて、指の腹で直接シコシコ扱かれ、私は人生で一度も出したことがない、情けないオホ声を漏らしてしまった。

「あ、くるっ♡ きちやうのおっ♡♡ それっ♡♡ イッチやう♡♡ イッちやうからあっ♡♡」

「えっ、イクの早くない？ まだ、クリ撫でてるだけなのに。深沢ちゃん、早漏すぎだろ♡♡」

「あっ♡♡ せんぱいがっ♡ じょーずだからあああっ♡♡ あっ!?!♡ やっ♡  
やああっ♡ おまんこに指いれるにやああ〜っ♡♡」

「じょーずって褒めてくれたお札にイかせてやるよ♡ イけイけ♡ イーけ♡ ほ  
ら♡ 前教えたのやってやるから♡ こうやったらすぐに潮吹いちゃうヤツ♡♡♡」

内側の天井、おなかの側にあるざらざらした部分。女の子の弱点。潮吹きスイッチ。  
ぐちゅぐちゅに濡れそぼった割れ目から先輩の指が侵入して、私のGスポットを甘  
く刺激し始めた。

すりすり♡ すりすりすりすり♡ トントントン♡ トントンッ♡

我慢できないくらいの快感が足の先まで突き抜けていく。脳みそが沸騰して、とろ  
とろに溶けていきそう。

(あっ♡ ダメっ♡ 出ちゃうっ♡ 絶対に潮吹いちゃうっ♡♡♡♡♡)

おなかの底から熱い奔流がせり上がってくる。潮吹きなんてしたことない。どんなに激しいオナニーをしても、そこまでは至らなかった。おしっこは違うと言うけど、こんなのおもらしと一緒に。

我慢しなきゃいけないのに。したいのに。Gスポットとクリを挟んでブルブル♡ブル♡と震わせられると、全身がギュッと硬く緊張してしまう。

イッたら、身体がゆるんでしまう。

ゆるんでしまったら、もう、絶対に、我慢できない――。

「おおああっ♡♡ ダメっ♡♡ ダメダメダメっ♡♡ イくっ♡♡ イくイくイくっ♡♡ もれりゆうううっっ♡♡♡♡」

ビクッ！ ビクビクッ！！♡♡

ぷしっ♡　ぷししいっ♡♡　ぷしゃあああああ……♡♡

熱い液体が、水鉄砲みたいに何度も何度も飛び出していく。止めたくても止まらない。指先までピクピクと痙攣して、喉からは「あ、あ、っ……♡♡♡」と、言葉にならない声が漏れ続ける。

ラブホテルの室内にむわあっ♡とした甘い香りが立ち込める。最後の一滴まで絞り出されるみたいにイッて――

そのまま、力が抜けてシーツに沈み込んだ。

（何これ……オナニーと、全然違う……♡♡♡）

視界がチカチカして、先輩の顔がよく見えない。自分の体温が上がりすぎて、シーツが冷たく感じる。オナニーで感じる絶頂とは全然違う。私は口の端からよだれを零しながら、しばらく呆けていた。



「深沢ちゃん、大丈夫？」

「ふっ……はあっ……だい、じょーぶ、です……っ♡」

「はは、いい返事♡ ほら、深沢ちゃんが見たかった勃起ちんぽだよ♡」

ぼろんと鼻先に突きつけられたのは、凶器だった。

ドク、ドクと生き物のように脈打つその肉塊は、赤黒く変色してパンパンに膨れ上がっている。

さっきまでの七割勃起なんて、まだ可愛いものだったんだ。全然違う。浮き出た血管が今にもはち切れんばかりにのたくっている。反り上がり方も、先端から出てくる我慢汁の感じも、今の方が凄い。私はヒュッと息を呑んだ。

「ふっ♡　すごっ♡　ふーっ♡　ふーっ……♡」

「はは、発情顔やつばあ……♡　深沢ちゃんの潮吹きアクメが可愛かったから、いつもよりデカくなっちゃったあ♡」

そう呟いた先輩は、私の目の前でゆっくりと、自身を誇示するように扱いて見せた。ぽた、ぽたり。先端から溢れ出した我慢汁が、私の頬に滴り落ちる。

（あ……ああ……♡♡　すごい♡　ちんぽ♡　ちんぽだあ……♡♡）

「ほら、好きなだけ描いていいよ」

ぐったりとベッドに投げ出された私の手に、クロッキー帳と鉛筆が置かれる。

（あ、っ……か、描かなきゃ……っ）

無理だ。線がまともに引けない。指先がガタガタと震えて、鉛筆が手から滑り落ち

そうになる。絶頂の余韻で頭がぼーっとしているせいだけじゃない。

「ふっ……舌、べろーんって出てる。犬みてえ♡」

「あっ……ああ……♡」

「ヘソ天で、腰もヘーコヘーコ動いちゃってさあ……発情期のワンちゃんなんですかあ？」

「あ、ち、ちが……っ、これ、はっ……♡」

腰が勝手に浮き上がり、先輩に向かってヘコヘコと突き出してしまう。

ダメ。ダメだ。もう我慢できない。

（ちんぽ欲しい……っ♡ 挿れて欲しい……っ♡ もっと、もっと、さっきよりも、めちやくちやに気持ちよくなりたいっ……♡）

私はクロッキー帳を放り出し、涙目で先輩を見上げた。

もう、資料がどうなんて言っていられない。プライドも、恥じらいも、全部どろどろに溶けて流れ出していた。

「あ、ああ……っ♡ せんぱいっ……♡ おねがい、しますうっ……♡♡ ちんぽ、いれてください……っ♡」

足をはしたなく広げ、秘部の両端に手を置いてくばあ♡と左右に広げる。プライドなんてない。関係が壊れちゃうかもとか、気まづくなるかもとか、全部どうでもよくなった。

先輩とセックスがしたい。もっと気持ちよくなりたい。

滲む視界のせいで、先輩がどんな表情をしているかは分からない。でも、ちんぽはしっかりと勃起したままだ。先輩だってこの状態にいるのはさぞ苦しいだろう。

「――写生は、もういいの？」

「あ……っ♡ ああっ……♡ もう、いい、からあ……♡♡」

「俺とセックスしたいんだ……？」

「したいいっ♡ セっくす、したいですう……♡♡♡」

先輩は低く笑うと、節くれだった指を私のおまんこに潜り込ませてぐちゃぐちゃにかき回し始めた。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ♡♡

くちゅくちゅくちゅくちゅっ♡♡

さっき潮を吹いたばかりのおまんこは、ちよつと触れられただけでも達してしまいそうなくらい敏感なのに、先輩は容赦なく責め立ててくる。指を二本差し込んで花弁

を開くように中でぱくぱく動かされると、羞恥心で頭がおかしくなりそうだ。

「あああっ♡　ちがうっ♡　ちがうのおっ♡　これじゃないっ♡　おまんこぱくぱくしにやいでえええっ♡」

「えー？　これされるの気持ちよくない？　すっごい声出てるじゃん♡」

「ちがああうっ♡♡　ちんぽがいいのおおっ♡♡♡　せんぱいの、おちんぽっ♡　おまんこのなかにいれてほしいのおっ♡♡」

「……っ、あのなあ……」

内側を暴き立てていた先輩の指が、ぴたりと動きを止めた。

（なん、で……？　なんで、止めちゃったの……？）

おまんこをヒクヒクさせながら困惑する私を見つめて、先輩は困ったような顔で微

笑んだ。

「お前さあ——絶対後悔するからやめとけよ。指で、たーっぷりイかせてやるからさあ……な？」

「あ、ああ……やだ、やだあ……ちんぽがいい……」

「ワガママ言うなって。今、絶対ノリでしなくなってるだけだから。お前処女だろ？最初はめちゃくちゃ痛いし……やめといた方がいいと思うけど？」

「だ、だいじょうぶ、ですう……っ♡ いれたこと、あるからあっ……♡♡」

「はあ？」

「バイブで、れんしゅう……したこと、あるからあ……っ♡♡」

処女だけど、処女膜はない。資料のために買ったバイブで、私は処女を喪失してい

る。私の持っているバイブより、先輩のモノの方がずっとずっと大きいけれど、痛くて全く挿入できないなんてことにはならないはずだ。

私の告白に、先輩がため息を漏らす。

「お前なあ……漫画のために体張りすぎだろ」

「だ、だってえ……知らないと、描けないし……!」

「あーもう……ほんとに……さあ……っ!」

先輩は私の腰をがっしり掴み、蜜で濡れそぼった入り口に熱い塊を押し当てた。ぐりい、と先端が食い込むだけで、脳が震えるような快感が襲いかかる。

「今から……バイブじゃ絶対にできないこと、するから」



内側の柔らかい粘膜を、熱い肉塊がゆっくりと押し広げていく。毎晩のように使っていたおもちゃとは比較にならない太さと硬さが、私の中をみちみちと埋め尽くしていく。

（あ、あ、あああああ……っ♡♡♡♡ 待つて、待つて、くる……っ♡♡♡ すごい、太いの、きてるう……っ♡♡♡）

痛みはなかった。ただ、自分の体が内側から作り変えられていくような、暴力的なまでの圧迫感。

ぐちゅ、ぐちゅぐちゅうっ♡♡ ぐちゅちゅううっ♡♡♡

入り口から奥へと、少しずつ侵略されていく。

きつくて苦しいはずなのに、中がうねって、もっと奥へ、もっと深くへと、先輩のちんぽを飲み込んでいく。

「ふっ……はあ、はあ……っ♡ 大丈夫……？ 痛く、ない……？」

「あっ……♡ ああっ……♡ ヘーキ、だけどお……♡ おっきい……♡」

「っ……♡ お前、なあ……っ！ 狭すぎんだよ……っ！ きっっ……全部、食われ  
そう……」

眉間にぎゅっと皺を寄せた先輩の声が苦しげに歪む。

少しの申し訳なさと、それを上回るほどの愛おしさが込み上げてきて、私は彼の背中に腕を回してしがみつくように、ぎゅっと抱きしめた。

「……っ♡ほんと、お前、さあっ……♡♡♡」

耐えかねたように呻いた先輩が最後にぐっと腰を押し込むと、子宮の入り口を直接

突き上げるような衝撃が私の全身を貫いた。

（あ、ああ……っ♡ 全部、ぜんぶ、入っちゃったあ……っ♡♡）

お腹の奥の奥まで、先輩で満たされている。ぴたりと密着しているから。先輩の激しい心臓の音が伝わってくる。私の鼓動も、きっと早い。頭がとろけて、先輩のことしか考えられない。

「せん、ば……っ♡♡」

胸元に顔を埋めてすりすり甘えようと、先輩も私のことをぎゅっと抱きしめ返してくれた。繋がった場所からじわじわと広がる快感が、鼓動と呼吸を合わせるたびに深くなっていく。

「動く、けど、いいよな……♡」

「あ、まっ……ひゃああっ♡♡♡」

「ごめん、待てない……♡」

先輩は、私の返事を待ってくれなかった。耳元で甘く囁かれた瞬間、私のおまんこがキュンキュン♡と先輩のモノを淫らに締め付けてしまったからだ。どのみち、答えは決まっていたけれど。

とちゅっ♡♡ とちゅっ♡♡ とちゅとちゅとちゅとちゅ♡♡♡ とー……

ちゅんっ♡♡♡ どちゅんっどちゅんっどちゅどちゅどちゅんっ♡♡♡♡♡♡♡

浅いところ焦らすように小刻みに弄ばれているかと思えば、一気に奥まで叩き込まれた剛直に子宮の入り口を激しくノックされる。こんな動き、バイブじゃ、オナニーじゃ、絶対できない。無機質なプラスチックの振動とは全然違う。

（これが本当のセックスなんだ……♡）

「ふふ、これ気に入った？」

「おおあっ♡ ひ、あ……っ！ しゅきっ♡ しゅきいっ♡ おーっ♡♡ おーっ♡♡  
♡♡」

『『おーっ♡ おーっ♡』って声、マジかわいー……♡ 俺、声でっかい子好き♡  
もっともっと、たくさん出して♡』

ゆるい刺激に翻弄され、ようやく慣れてきたと思った瞬間にやってくる、脳を揺らすような不意打ち。

頭が真っ白に混乱していると、今度はまたゆるい愛撫に切り替えられ、私の身体はますます制御不能になっていく。

もっともっと子宮をいじめて欲しくて、おまんこが甘くせつなくひくついてしまう

……♡

「あ、あぁっ……♡　すごっ、すごおおいっ……♡　せんぱいの、おちんぼ、なか  
でおっきくなってるううっ……♡♡　おっ♡　おっ♡　ほおおおーっ♡♡♡♡♡」

「ふっ、はぁ……っ！　お前、イく時はちゃんと saying って……！　まんこの動きやバ  
すぎるからっ♡　吸い付いて、離してくれないんだけどっ♡♡」

「あっ……♡　ごめん、なさいい……っ♡♡」

「謝んなくても、いいけど……っ♡♡　あ、そーだ♡♡♡」

先輩は私の両足首を掴むと、身体を折りたたむようにぐいと押し上げた。膝が胸  
のふくらみを押しつぶす。赤ちゃんが おむつ を替えてもらう時のような、無防備な体  
勢。

「膝の裏、自分で持てるか？」

「は、あっ……♡ もてましゅ……っ♡♡」

漫画の中で何度も見てきた。自分で描いたこともある。でも知らなかった。こんなに屈辱的で、いやらしい体位だなんて。

全部が見える。カリの段差があるのが見えるほど真っ赤に昂ぶったクリトリスが、ピクピクと快感に震えている。そのすぐ下では、熟した果実みたいな色のおまんこが大きく口を開けて、先輩の剛直を咥え込んでいる。おまんこの周りで白く泡立つ液体は、愛液か潮か見分けがつかない。

（これ……まんぐり返しだぁ……♡♡♡）

視界に広がるのは、はしたなく暴かれる自分の秘部と、そこを蹂躪する野卑な剛直。目を覆いたくなるほど恥ずかしいはずなのに、私の手は「もつと見て」とねだるよ

うに、膝をさらに大きく割り広げてしまった。

「ふふ……エロすぎ」

膝立ちになった先輩が、ふっと微笑む。安心させるような優しい笑顔。でも、その直後に始まった動きは優しさなんて一かけらもない無慈悲なピストンだった。

ずろろお……♡    どちらゅっ♡    ぐりゅぐりゅぐりゅっ♡♡    どちらゅっ♡    ど  
ちゅっ♡    どちらゅんっ♡    どちらゅんっ♡♡♡

膣ひだを一枚ずつ確かめるように、ゆっくり腰を引かれる。

嫌だ。抜かないで。内壁が追いつがろうとした次の瞬間、粘膜をかき分けるように、真上から奥まで一気に突き入れられる。その勢いのまま子宮口をこじ開けようとぐりぐり腰を回される。



「ひ、ぎゅあっ♡♡♡♡ やだっ♡♡ やだっ♡ 種付けプレスやめでええ  
えええっ♡♡♡」

「へー、オタクはそういう名前で呼んでるんだ？」  
からかうように囁いた先輩は、全体重をさらに乗せて、深く深く、お腹の形が変わっ  
てしまいそうなくらいのピストンを繰り返す。

「やだやだっ♡♡ ああっ♡♡ ああっ♡♡ いぎゅっ♡ いっぢやうっ♡ へん  
ないイギがたすりゅのやだああーっ♡ おっ♡ へんになりゅっ♡♡ ばかにな  
りゅううっ♡♡♡ お、おーっっ♡♡♡♡♡♡♡♡」

「いいよー♡ だめなイキ方しちゃお♡ お前がめちゃくちやになっても、俺がちゃ  
んと面倒見てあげるから♡♡」

お腹のいちばん深い、いちばん柔らかいところで、凶悪に反り繰り返った先端が暴れ回る。

重い。熱い。一発ごとに脳髓が焼き切れそうになる。怖い。やめて欲しい。でも、最高に気持ちがいい。このままおかしくなりたい。もっと変になりたい。

自分という存在がバラバラに解体されていく。でも、バラバラになったとしても、先輩から与えられる快感が私を新しく作り直してくれる。ちんぽのことしか考えられない、セックスのことしか頭にない、ただのスケベな雌に。

「ん、んおおほおおつつ♡♡♡♡♡ あ、そこっ、そこしゅごいつ♡♡♡ しゅごすぎるうううっ♡♡♡♡♡ ちんぽっ♡♡ ちんぽきもちいいーっ♡♡♡ しゅきっ♡ しゅきしゅきっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ちんぽしゅきっ♡♡♡♡♡ せっくしゅだいしゅきいいいゝゝゝっっっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「あーあ♡ 頭くるくるぽやぽやになっちゃった♡ おーい、帰ってこーい♡♡」

激しく肉壁を挟る腰使いはそのままに、片手がぱんぱんにふくれ上がった股間のクリトリスを、もう片方の手がはち切れそうな乳首を同時に捉える。

（あ♡♡♡ だめ♡♡♡ だめ♡♡♡ 今クリと乳首触れたら♡♡ もっと頭  
おかしくなる♡♡♡ ひぁぁぁ♡♡♡♡♡♡ いく♡♡ いく♡♡ いく♡♡  
ちやう♡♡♡♡♡）

情報の濁流に脳がショートしそうなところへ、先輩はさらに追い打ちをかけるように私の耳元へ顔を寄せ、熱い舌で私の耳朶をちろちろ♡ちろちろ♡と舐めはじめた。

「つつつ〜♡♡♡ あ♡ あ、あ♡♡♡ ひ、あああ♡♡♡♡♡」

「あはは♡ 全然戻れない♡ 気持ちよすぎて、頭バカになっちゃったなあ……♡  
かあわいい、かわいい、かわいい……♡ ねえ、深沢ちゃん、どこが一番きもちいー  
……？」

「ああ♡♡ わ、かん、にゃあ……♡♡♡」

「ええ〜？ わかんないんだ？」

じゅるるる♡♡ どちゅん♡どちゅん♡♡ すりすり♡♡♡ くちゅくちゅ♡♡  
♡♡ くにくにくりゅくりゅ♡♡ カリカリカリ♡♡♡ ばちゅばちゅばちゅ  
ばちゅ♡♡♡ れろっれろっれろお♡♡♡

視界がぐるぐる回る。身体中の穴が、粘膜が、すべての性感帯が、先輩から与えら

れる刺激を求めて激しく痙攣する。自分がどこにいるのか、何をしているのか、今なにをされているのかさえ、よくわからない。よだれを垂らし、髪を振り乱しながら、四方向から同時に叩き込まれる快感に翻弄される。私はただ、壊れたおもちゃのように果て続けることしかできなかった。

「っ……出るっ……！ 奥で、出すぞ……っ♡」

先輩の声が獣のように低く唸った瞬間、私の子宮口を塞いでいた剛直が、はち切れんばかりにビクビク拍動した。

「あ、おおっ♡♡♡ ほおおおおっ♡♡♡♡」

ドクンツドクンツ♡♡ ビュクッ、ビュクビュクビュク♡♡♡♡♡♡♡♡

凄まじい質量を持った精液が、何度かに分けて私の奥底へぶちまけられる。一発一発の噴射が重く、熱い。お腹の中を、ドロドロと濃厚な液体が埋め尽くしていく。

（あ、中出しされちゃった……♡）

コンドームのこと、全然考えていなかった。そんな余裕はなかった。抜かなきゃいけないのだろうか。身をよじろうとすると、逃がさないと言わんばかりに先輩にぎゅっと抱きしめられた。何度も何度も腰を強く押し付け、最後の一滴まで私の中に注ぎ込んでいく。

「ふっ……くう……」

ドサリ、と全身の力を抜いた先輩の身体が、私の胸の上にのしかかってきた。

「…………ぐえっ」

「あ……わりい。重かったか」

つぶれたカエルのような声で呻くと、先輩は身体をずらしてくれた。結合部はそのまままだ。どのタイミングで抜けばいいんだろう。抜いたら多分精液がシートにこぼれてしまうけど、ラブホテルだから大丈夫なんだろうか。

「お前、なんか変なこと考えてるだろ」

至近距離で見つめられる。額に張り付いた髪、汗で濡れて色っぽく光る首筋。満足げで、どこか幼さを感じる無防備な表情。セックスした後の先輩の顔。九百九十八人が見てきた顔。九百九十九人目の私。

私は、先輩が一人目。私は、今どんな顔をしているだろうか。

密着した胸板から、鼓動が伝わってくる。先輩もドキドキしている。私も、ドキドキしている。

（ああ……これが、リアルなんだ……）

どんなに正確な線でも鮮やかな色彩でも、この色気は表現しきれないだろう。圧倒的な生命の熱量。私の先輩。

ものすごいヤリチンで、セックスが好きで、セックスが上手い。

私は震える腕で、先輩の背中にしがみついた。

「……っ、深沢ちゃん？」

「すごい、かったあ……♡♡」

「……………ふふ」



独り言のような呟きが、先輩の胸に吸い込まれる。すると、先輩が私の顎を優しく持ち上げ、そのまま重なるように唇を落とした。

「ん…………う…………♡♡」

ちゅ…………ちゅ…………♡

角度を変えて、何度も口付けられる。さっきまでの激しいセックスとは、全然違う。慈しむような、丁寧で、とろけるようなキスだった。

「なん…………で…………？ キス、したの…………？」

「ん…………可愛かったのと…………感謝？」

キスの続きみたいな距離で意地悪に笑う先輩の瞳に、とろんとした顔の私が映っている。切れ長の瞳が、こんな表情の女の子を映すのは九百九十九回目だろうか。

（それとも……キスだけなら、もっとたくさんしているのかな……）

私は自分からもう一度、その唇を追いかけるように不器用なキスを返した。これが、千回目だったらいいのに。なんて思いながら。

だって、どうせだったらキリのいい数がいい。そう、決して他意はない。ないはずだ。